

## 頭痛に対する OTC 鎮痛薬の有用性評価と薬剤間比較

(株)ユネット 清風薬局<sup>1)</sup> 九州保健福祉大学薬学部 臨床薬学第一講座<sup>2)</sup>

○山見尚子<sup>1)</sup>、浦野一貴<sup>1)</sup>、岡田幸二<sup>1)</sup>、長友保憲<sup>1)</sup>、野田千里<sup>1)</sup>、福永雅史<sup>1)</sup>、山下力<sup>1)</sup>、井上美穂<sup>1)</sup>、川瀬美紀<sup>2)</sup>、比嘉豊<sup>2)</sup>、本屋敏郎<sup>2)</sup>

【目的】昨今一般用医薬品（OTC 薬）の需要は増加しているが、その有用性に関する調査成績は少ない。そこで頭痛に対する OTC 医薬品の鎮痛効果や使用後の満足度等についてのアンケート調査を行い、昨年の本大会において発表した。さらに今回は、追加調査を行うと共に、緊張型頭痛に対する一部薬剤間の比較を行ったので報告する。

【調査方法】調査は清風薬局（熊本県人吉球磨地方）にて OTC 鎮痛薬を購入された一般消費者を対象とし、購入薬剤を使用後、次回来店時に調査者が対象者に質問し、調査票に記入するという方法で行った。調査期間は 2012 年 2 月 1 日～3 月 16 日及び 2013 年 2 月 14 日～5 月 21 日であり、調査項目は、年代・性別、薬剤名、頭痛のタイプ、効果の満足度、不快作用の有無、鎮痛効果等とし、鎮痛効果は 0～5 の 6 段階で表した VAS スコアを用いて、経時的に評価した。頭痛のタイプは、頭痛に関する研修を受講した調査者が対象者の症状を聴取し、調査票の記載項目から選択し記入した。

VAS スコアの変化に関する有意差検定は、薬剤服用前後の時間間の差については、初め Repeated measures ANOVA で群間比較を行った後、Student-Newman-Keuls (SNK) 検定で総当りの多重比較を行った。また薬剤間の有意差検定は時間毎に Non-repeated measures ANOVA を行った後 SNK 検定で多重比較を行った。解析ソフトは ystat2008 を使い、 $p < 0.05$  を有意差とした。

【結果】調査期間中の有効回答者は 55 名、性別は男性 12 名、女性 42 名、不明 1 名であった。使用商品は 15 品目であった。使用目的とした頭痛のタイプは、緊張型頭痛 30 名、片頭痛 12 名、感冒による頭痛 2 名、不明・その他 11 名であった。緊張型頭痛に対して、服薬前の VAS スコア 2 以上の対象者において、ロキソプロフェン製剤服用群(6 名)の VAS スコア値は服用前： $2.8 \pm 0.3(\text{SE})$ 、0.5hr 後： $0.8 \pm 0.3$ 、1hr 後： $0.2 \pm 0.1$ 、2-8hr 後：0 であり、服薬前値に対し 0.5hr 以降 8hr 後まで有意な( $p < 0.01$ )値の低下がみられた。また 0.5hr 後の値に対しても 1hr 後以降 8hr 後まで有意な低下が観察された。同様にアセトアミノフェン+エテンザミド製剤服用群(8 名)の VAS スコアは、服用前： $2.5 \pm 0.2$ 、0.5hr 後： $0.6 \pm 0.4$ 、1-8hr 後： $0.1 \pm 0.1$  であり、服薬前値に対し 0.5hr 後以降 8hr 後まで有意な( $p < 0.01$ )値の低下がみられた。また 0.5hr 後の値に対しても 1hr 後以降 8hr 後まで有意な低下が観察された。さらに薬剤間の各時間毎の VAS スコアの比較を行ったところ、ロキソプロフェン製剤服用群とアセトアミノフェン+エテンザミド製剤服用群の間には、何れの時間においても有意な差は観察されなかった。また両薬剤群とも不快作用の経験者はなかった。

【考察】OTC 頭痛薬の使用目的としては、昨年の調査と同様に今回の調査でも、緊張型頭痛が半数以上を占めた(30/55 名)。OTC 頭痛薬の中でロキソプロフェン製剤は新しい薬剤であり、鎮痛作用も強力であるが、VAS スコア 3 前後の中等度緊張型頭痛に対して OTC 医薬品を用いる場合、ロキソプロフェン製剤とアセトアミノフェン+エテンザミド製剤の間に有用性の差はないものと考えられた。

キーワード 頭痛、緊張型頭痛、OTC、鎮痛薬